

夜空ノムコウ

まほろば主人

宮下 周平

(仁木農場より)

夜空ノムコウ

「父さん、星が……！」

息子に呼ばれて、作業のさ中、納屋から外に飛び出した。

何と、満天の空に、星という星が貼り付いて輝き出している。

それは尋常な星空ではなかった。生まれて初めて見る群星の存在だった。

文明の光を落とした漆黒の闇夜では、星という存在がかくも心に迫って来るものかと目を瞠みはった。

星座の背景にさらに星座が輝いて、二重にも三重にも重なって光り輝く夜空は、もうこの世のものではなかった。

「アあ……！！！！！」

と絶叫して、後は沈黙するだけだった。

大豆を刈り取って実を外した豆粕まめがらの山に寝転んで、二人して見上げていた。すると、星は彼方にあるのではなく、まるで家の天井にあるような、手を挙げたら掌てのひらに零れるような身近な感覚だった。

「あれが北斗七星、あれが北極星……あれがオリオン座……」

あとは、言葉を失った。

天と地は、こんなにも近いものなのか。一枚板のような錯覚さえ覚えた。あるいは、自分の体の中に、星々が入り込んだようだった。その時、自然はこんなにも近く、親しく、自分の中にすべてが在るものか、一切が移るものなのか、と感動してしまった。

『銀河鉄道の夜』や『よだかの星』の宮沢賢治さんも、こんな感性で童話を書いたんだなー、と想像した。青春の扉を開いてくれた谷川俊太郎さんの詩集『20億光年の孤独』も。

星一つの輝きが、何億光年前に発した輝きだなんて……、そんな悠久の年月と私が出会って今一つになっているなんて……、宇宙って何

て素敵なんだろう、と思ったことか。

家屋^{ゲル}から出て、月天を見上げた内モンゴルの清夜でもこの思いに至らなかつた。頭の毛も手拭いもバリバリに凍った父との銭湯の帰り、向こうの恵庭岳から高く広がる冬空の星々にも、こんな印象を幼き日に思い出せない。それが、札幌から車で一時間ほどの仁木で体験できるとは、思いの外だつた。

そして、おのずから古代の人々に想いを馳せた。電灯もない昔の真つ暗闇の生活は、怖いのではなく、想像を絶するほど豊かで温かかつたことを。この美しさ、この豊かさ、この清らかさ、何と言おう。こんな浪漫的夜の静寂^{しじま}を過^いごせる古の素朴な生活の限りない深さ、趣き^{ロマン}を思つた。どんな娯楽も世界の秘境も要らないであろう。P^{パソコン}Cで映るリアルで鮮明な画像の、却^{かえ}つてその貧しさを知つた。我々は風景を写しているが、風景を観ていなかつたのかもしれない。

古代バビロニアで起こつた占星術や、古代中国で伝わつた夏殷^{かいん}周の天文学、それらはこの夜空を掌^{たな}のスクリーンに映すように挿^かんでいた。行商する砂漠の旅の路標^{みちしるべ}となり、糧を得る農事の曆^{こよみ}ともなつた。それはこの星たちを自分の内なる心に、一枚鏡に映すように取り込めない、天体の神秘を読み解きは出来なかつただろう。飽きもせず、どれほどじっと見詰め続けていたのだらう。ちよつとした輝き、運行や形の微かな動きが、吾が内なる変化のように分かり、暑い夜も、寒い朝も、夢中で観察した。楽しくて楽しくてしようがないほど面白くなければ叶わないことだ。



古代中国 天体図



ギリシア神話「ギガントマキア〜オリュポス神族と巨人たちの戦い」

この星座との会話から、ギリシアや多くの国々で、神話や予言が生まれ、天文地理の科学が生まれ、宗教哲学が生まれ、文学芸術が生まれ、王族国家が生まれ、そして親子と男女の愛が生まれていったことだろう。

エルサレムの城でも、喜望峰の海でも、マチュピチュの崖でも同じ星々。ガリレオも、始皇帝も、紫式部も観た月は今と同じ。古今も東西も繋がって行く。何がなくても、どれほど自然はあり余れるほどの真理の豊かさ、そして命の繋がりを垣間見せてくれているのだろうか。

月をみて 月に心の すむときは

月こそおのが 心なるらめ

(山崎辨榮上人 『道詠集』より)

この日9月23日は、天赦^{てんしゃにち}日。百神が天に昇り、天が万物の罪を赦^{ゆる}す日、「万善^{よろこび}し」とされる最上の大吉日であつたとか。そのお恵みで、こんな夜空を見せて下さつたのかもしれない。

SMAP^{スマップ}の唄を聴きながら、「夜空ノムコウ」の明日^{あした}は、「僕ノコツチ」にあつたことを教えてくれた。



大豆の気持ち

「もう、諦めて!!」
と、言い放つ家内。

夜更、ムッリ



一日中、ザンザンと陽が当たるのも恵みの栄養。



今の脱粒機の原理も、昔の唐箕(とうみ)と同じである



二台の車のライトを点けながらの脱粒作業。夜遅くまで続く。

「除草できなかった所は、草刈機で、大豆毎潰すしかないと思うけど……」と説く。

しかし、見捨てるに忍びがたく、幾度か手を付けるが、伸び行く雑草を、取り切れない。情けない。

作業が後手後手に回り、今や大豆の除草をしようにもオツツかない。最初、カルチベーターで除草をしたものの、発芽率の悪かった処は、株間が雑草だらけになってしまい、機械では除草し切れないのだ。

次々と襲って来る仕事に手のかかる除草には手が回らなくなっていった。放っておいたら、背丈以上に伸び切る夏草の勢いのよさには、ほとほと感心するものの、大豆は陰に隠れて見る影もなかった。それ以後も成るに任せるしか手がなかった。いよいよ夏も終わり、収穫が始まった。

配電されていない。発電機を借りての作業、一気呵成に終わらせねば。車で畑との往復で次々と脱穀、夜遅くまで作業は続く。山と積み上げられた枝豆。これを処理するのに、プロ農家は何段階にも分けて手選りするという。中札内では、共同の何千万円ものハーベスタで一挙に刈り取り脱穀して工場を選別、一挙に冷凍、その間3時間。とにかく時間との勝負だ。



一株に、こんなにたわわにも実を付け、成長する。

雑草だらけの周り以外は、意外にも実入りがいイ。どうして、こんなにもいいのか、と思わせるほどだった。

大豆を刈るのは苦ではない。だが、実を外すのが殊の外、時間がかかる。それ以上に選りするのに何と時間を費やすことか。発泡箱一杯にするのに、優に1時間はかかる。これでは、他の仕事ができない。枝豆脱粒機を購入したものの、200Vが納屋には



倒れて葉の陰になっても踏ん張って、こんなにもたくましく生き抜く力を見せつけられる



(上) 空中から窒素成分を取り入れる大豆。その秘密がこの根粒菌。でかくて多い。
(左) こんなにも太い茎。3~4cmはある



一つ一つの株を伐る。中々の物だ。太い。大きい。長い。倒れている茎もあるが、それを起こして進む。これが厄介だ。だが、倒れた青白い枝から、「これでもかー!」とばかり、めげずに実を付けている。「すごいゾ!」。それが半端でない。倒れても倒れても成っている。「何だ、お前たちは! 倒れながらもガツツリ、自分の為すべき仕事をしているではないか!」ズッシリ重い一株が、脱粒機に入らないくらい一杯の枝を付けている。グルッと株を回してもまだ実が離れずに付いている。たまたま数えてみた。一株の主幹に14もの枝をつけて、196粒。重い訳だ。そんなのが放任で、雑草だらけのかわいそうな環境でも、たくましく育って来た。スクスクというより、ギューギューと言った方が当たっているだろう。今にして思えば、何とかしてやれなかったものかと思うものの、その踏ん張り処の天晴れさには脱帽した。

「雪音」は、その嫺やかな女性的イメージにそぐわないほど北国に生きる力強いオツ母さんだ。ありがとう!!! (注1)



じゃが芋の手掘り作業。三人の機動力で瞬間に完了する。



手前右三人が三田トリオ。枝豆選り作業。たまたま、名古屋から「菱和園」の小尾専務が来園。以前農園に研修に来ていただいたこともある。

「サンタクローズ」がやって来た!

月に何度か、小別沢の農園部隊が援農に来てくれる。チーフの福田君、長老の高田さん、スタッフの池田さん。この三人だ。とてもとても、助かっている。

野生人とも言える福田君は今年で13年目、何でも熟してやってくれる頼もしい親分だ。高田さんは、まほろば創業時、市場の出入りを保証してくれた八百屋の大先輩で恩人でもある、今年77歳で好々爺。池田さんは口数が少なくヌーボーとしていますが、黙々と働き周りの人を和ませる癒し系である。この三人はいずれも田が付くので、三田：サンタと呼び、仕事を完成し、閉じてくれるのでcloseとこじつけ、「サンタクローズ」がやって来た」と

歓声を上げている。そう、人手の少ない仁木には、天の神様からのプレゼントなのだ。一人二人ではなかなか片付かない仕事も一日で一気にやってくれるから大助かりなのだ。人の和は足し算でなく、掛け算なのだ。ありがたい。皆のお蔭で、何とか成っているのだ。

夜空ムっり

かぼちゃ騒動記

あの「緑の海」が枯れて、漸く地膚じはだが見え始めたころ、そこら中、ゴロンゴロンとかぼちゃが転ころがっていて、こんなにカボチャって成るものかと興奮した。家庭菜園では一つ見つけ！二つ見つけ!!と心躍るものだったが、収穫しても収穫しても、次から次と採り切れないかぼちゃにホトホト疲れてしまった、というのが正直な本音だった。

これも、大豆同様、構つらい切れなかった最高峰で、手の施しようがなかった第一番のものだ。本来は摘つる芯して一本仕立て、二本仕立て、三本仕立てと揃えて、蔓つるの方向を定め乍ら、実成りを良くするために手入れする。最初が肝心だ。だが、これもご多聞に漏れず、構つらい切れなかった。とにかく目の前のやらねばならない作業が優先になる。

「かぼちゃ君、相済あひすまない!!!」

次々と襲おそい掛かる農作業に目を回しながら、かぼちゃを尻目しりめにすると、どんどん伸びて、広い通路がいつの間にか両側の葉で覆われ、それが繋がって、もう足を踏み入れる隙間がなくなってしまった。こうなれば、もう手が付けられない。下手に足を入れれば、茎を踏む。強制的に放任主義ほうんしぎでしかないのだ。玉の摘果も、裏表の返しも出来っこない。

そんなんで、採り入れも、そぞろ寒さむくなった晩秋。息子と二人して採っては運び、採っては運び、山のように積まれたかぼちゃを観て、初めてこれが農家というものか、と焦りと裏腹うらみに感慨深いものがあつた。全部で2000個もあろうか。5tトは下らない。(注2)



選別作業、中々見分けが難しい。キャッチボールのように投げでは受ける。



ゴロゴロと成っている南瓜達は壮観。緑の海は、茶色の土に戻った。



山と積まれた南瓜、南瓜、南瓜。



近所の農家さんから借りた南瓜磨き機。ブラシでピカピカになる。

肝心の味だが。恐る恐る食べたが案の定、今一甘くない。さもありません。致し方ないといえど致し方ない。だが、置いておくと、次第に美味しくなつては来ている。実に難しいのが、熟度の見わけだ。放任主義だから、三番果、四番果も結構大きくなって立派に見えたりするが混雑する蔓葉の陰で分からない。当然、未熟果がある。懸命に選んだつもりだが、それが無いとは言えない。(注3)

また日毎、寒さが増して来ると痛みが入って次々とダメになる。この寒波で、その激しさが一層増して来ている。何事でもそうだが、イイことづくめはない。



店に帰って、役員の意見を聞いた。大橋店長は、ネーミングを「甘さ控えめ南瓜」。ブラックジョークが得意な店長ならではの皮肉で、笑える。島田編集長は、ビートルズの「Let it be」。(なるようになるさ、あるがままに)。なるほど、なるようになった、あるがままのそのものだ。

ちなみに、店長の報告に、食事相談して、糖質制限の必要な人にテストすると、でんぷん質主体のじゃが芋はどんな農法の物もマイナス反応なのだが、仁木のアンデスやディンキー芋は、不思議とプラスになって、勧めたというのだ。「やはり、最後は、生命力でしようか」との見解だった。南瓜もそうではなからうか。

農産物の種子は、遺伝子組み換えやF1種子は勿論の事、在来種までが固定化されてコントロールされている。そもそも自然界には、固定種というものがない。常にかき合わさってダイナミックに変化

し進化する。それを一定条件の中で、交配させないように固定化させ、安定化させる。自ずから、種子の自発的能動性は奪われるであろう。自然界の種子は、自然交配によってのみ、何万年も種子は継承されてゆく。もし、固定されているというならば、それは長いスパンの一瞬の出来事に過ぎない、錯覚なのだ。

仁木農場の南瓜は何種類も自由に交配させているので、従来の名前が使えないのでオリジナル名をつけた。(上記POP参照)



収穫後の刈り取り作業。これで、漸く畑がスッキリする。

抑々、仁木に移住したのが5月。6月に入ってからの本格作業。南瓜の苗定植が一カ月以上遅れ、しかも双葉の開いたばかりの早苗を植えたので、甘さが乗らないのも当然と言えば当然かもしれない。来年には、適時に定植して、検証したい。

栗に想う

こもり居て木の実草の実ひろはじや

芭蕉(後の旅)

前の家主さんが、娘さんの誕生記念に家の前に一本の栗の樹を植えられた。70年も経った大木である。この晩秋、栗が落ち始めると毎朝、それは見事なくらい周りを覆い詰めた。枝の上では弾けるように割れて、直下に落ちて来る。はち切れんばかりの実入りで、近所の人

夜更、ムっら



家の隣になる栗の大木。時が来たら、樹上で割れて自然落下。全て自己完結

に聞くと、あの名品「丹波栗」なのだと言う。北海道でも、こんな立派な栗が採れるものか、としばし感激してしまった。それが次々と落ちるは落ちる、まるで夢を見ているような心持ちになっている。これが自然の恵みというものだろうか。子供のようにうきうきと浮かれてしまう。おとぎ話の現実離れした不思議なひと時だった。その大木の下で浮かんできたのが、芭蕉の句「木の実ひろはゞや」であった。いかにも、晩年の隠棲を望んださまが彷彿とされ、翁の心境はかくの如きかと俤ばれた。

近所の栗農家さんからは、「前後に最低でも一回づつ農薬をかけなければ虫が入るよ」と忠告された。また、果樹農家は「ブドウで農薬散布するから低い処は何でもないが、高い枝の栗は虫だらけになる」と嘆く。しかし、この大木は、全くの放任。何も期待していなかったし、当然何も施

さなかった。でも、虫は入っていない。入っても50個に1個くらいだろうか。それも大して気にならない位、小っちゃい。

どんな世界でも、人の固定

観念というものは経験則を作ってしまうのではなからうか。そして、その経験則が固定概念化する。その悪循環が現代農業の行き詰まり、今の社会の居心地の悪さではなからうか。とにかく、何もしないで、何かが与えられるという感動は新鮮で、心が洗われる思いだ。山菜好きや魚釣りの人が多いのも、この快感なのだろう。ここを、老子は「無為自然」と語った。為さずして成る場に立ち会うことが、現代人に最も必要な学びのような気さえする。

この人の意思とか行爲がない処で、与えられる無上の物に、ふと太古を思った。

この豊かさが、縄文の豊かさではなからうか、と。

今、メソポタミア・エジプト・インダス・黄河の四大文明を超える世界文明の魁として注目されているのが、日本の縄文時代。それを「縄文文明」と呼び始めた。4,5000年が古代文明の終始なの、何と1万6千5百年前（3万7千年説もある）に興り、1万年以上も続いたという。それも、欧米での研究報告なのだ。狩猟から定住の農耕生活は、稲作麦作の発見により富の集積が起こり、支配と衆民のヒエラルキーが構成されて国造り、そして戦闘の有史時代が形



毎日籠一杯に、何籠も採れる歓び。



成された。自然回帰の旗頭^{はたがしら}、農耕が人類悲劇の引き金であったとは皮肉なものだ。だが、狩猟採集民にして巨大集落を形成しながら、あの文明群が辿った末路を見事に超えた縄文。

そのポイントに、この何気ない一粒の粟があった。そこには、農耕はなく、粟やドングリを植えて主食として、あとは山海



この殻を脱いで、再び自分に取り込む栄養とする。



手に余るはち切れそうな「丹波栗」。無肥料でこんなに大きくなる。

の恵みで充分事足り、しかも争うことなく、共存共栄の理想集団生活を送っていた。事実、この粟のありようを観て、他は何も要らないという気にさせられてしまうから不思議だ。

珍しく家内が栗ご飯を作ってくれた。その余りの美味しさに、三杯ものお代わりをってしまったほどだ。米を観たこともない先祖が、大事に栗を拾いながら、食卓に上がった栗で満足していた頃に帰るべきが、平和への近道ではなからうかと、ふと思ってしまう。

一粒の栗から、何万年前の歴史が遡^{さかのぼ}れるなんて、自然は何て素敵なんだろう、と改めて天を見上げた。



(注1) 収穫し切れなかった「ダダ茶豆」は大豆にして販売して、残りは「へうげ味噌」と「新醬」に。一度に販売し切れなかった「雪音」は生で冷凍してあるので、そのまま小分けして冷凍販売し、また、「黒豆」は、お正月の煮豆用に出荷する予定です。

(注2) 今一の南瓜なので、大幅にコストダウンして、寒さで痛まない内に、売り切りたいと思います。切り売りもしています。

(注3) もし、そのようなかぼちゃだったら、ご遠慮なくお申し出ください。返金もしくは代替品を差し上げます。